

◇箸墓古墳の変遷

I 円形壇の築造（二四八、九年）

(1) 魏の役人張政が見守る中で百余人が殉葬されたことや、「倭人伝」に塚高さの記載がないこととで、当初のヒミコの墓は円壇と考えられる。

(2) 張政が纏向宮を去って伊都国に戻るや、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に遷された。ホケノ山古墳は、ヒミコの存命中に寿陵として造られたらしい。

☆箸墓古墳は、ヒミコの宮殿・上之宮（巻向駅北、辻・巻野内）の真南に位置する。真北には、黒塚古墳が鎮座する。この三点を通過する南北の古代道は、上つ道と呼ばれてきた。

II 五段重ねの石積み円壇に造り変え（二五〇年頃）

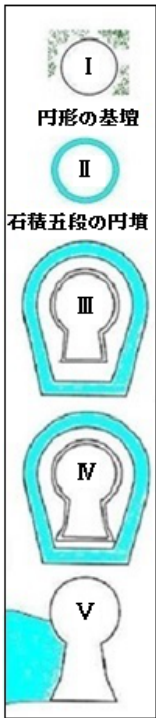
(1) 張政の帰国後（二五〇年頃）、円壇の周濠（内濠）を掘った残土で以て、五段重ねの石積み円壇に築かれた。その間、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に納められた。

(2) ヒミコの亡骸は、ホケノ山古墳から円壇最上段に埋葬された。その際、吉備に由来する特殊器台形埴輪・特殊壺が円壇上に副えられた。

III 帆立貝形前方後円壇に造り変え（二六〇年代後半）

(1) トヨの朝貢後、外濠（幅六〇〜七〇㍉）を掘った残土で、帆立貝形前方後円壇に造り変え。

(2) 想像するに、火明鏡速日はこれを泰山・梁父山に見立てながら郊祭して、自ら天神（天照国



照彦天火明饒速日)に昇ったのであろう。

『晋書』「武帝紀」、「泰始二(二六六)年十一月、倭人來りて方物を獻ず。南と北に円丘・方丘を併せ、二至の祀郊に合す」

(3)二七〇年代前半、女王トヨが三十五歳で逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に納められた。

☆大神神社は、ホケノ山古墳が豊鍬入姫の墓と伝える。

IV バチ形前方後円墳に造り変え(二七〇年代前半)

(1)その数か月後、倭迹迹日百襲姫が逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に仮葬された。

(2)バチ形方墳部が継ぎ足され、倭迹迹日百襲姫がそこに埋葬された。

(3)方墳表面が大坂山から運んできた石で覆われた。

☆崇神紀に、箸墓が築かれた時の様子が記されている。ここから、崇神・火明饒速日(日本大物主大神)・倭迹迹日百襲姫が三世紀後半に共に生きていたと分かる。

【箸墓伝説】、倭迹迹日百襲姫は大物主神の妻となった。その神は昼には来ず、夜になってから現れた。そこで倭迹迹姫は、夫にたずねた。

「暗くてはつきり見えない故、今宵はお留まりください。朝方に、麗しいお姿を拝見したいものです」

大神が答えて言うには、

「道理である。明け方に汝の櫛箱の中に入っていよう。わが姿形に驚かぬように」と。

姫が夜明けを待って櫛箱を開けると、衣紐大の麗しい小蛇が箱に入っていた。姫は驚きのあまり叫び声をあげた。大神はたちまち人の形に戻って、

「汝は我慢できず、私に恥をかかせた。ここから姿を消すことで、汝にも恥をかかせようぞ」と言うなり、大空を飛ぶようにして御諸山に登り帰った。姫はそれを仰ぎ見て後悔したのか、

腰の力が抜けて床にドスンと座り込んでしまった。そのとき、箸が体に突き刺さってみまかり、大市に葬られた。時の人はその墓を箸墓と呼んできた。この墓は、昼は人が造り、夜は神（三輪氏）が造った。大勢の人が大坂山から箸墓まで並び立ち、石を手渡して運んだ。

V バチ形を伸長した前方後円墳に造り変え（三〇〇〇～三〇〇四年初め）

(1)古墳の西を掘り起こし、ため池（大池）がつくられた。

(2)濠内の水がため池に引かれた後、内外の濠とも、ため池を掘った残土で以て埋め戻された。

(3)バチ形の方墳部がため池を掘った残土で、さらに継ぎ足された。

(4)女王トヨの亡骸も、ホケノ山古墳からそのバチ形部に遷された。

(5)石葺きの方墳全体がため池を掘った残土で、うっすらと覆われた。

(6)直後、二重口縁の壺形埴輪（三〇〇年前後の吉備系土器）がトヨの亡骸真上に副えられた。

★桜井茶臼山古墳の円墳・方墳上に靈時（天地五帝の神霊を祭る靈廟）が造営されると、箸墓円墳に眠るヒミコの亡骸が掘り出され、桜井茶臼山古墳の靈時に遷された。ついで纏向石塚古墳に眠る天照大神御霊も高皇産靈御魂として靈時に招来された。

★靈時の周囲に、三〇〇年前後の吉備系二重口縁壺が並べ立てられた。

★三〇〇四年の春二月二十三日（桃の咲く頃）、神武は高皇産靈に代わって靈時で郊祭し、皇祖天神を天に配して皇祖皇宗に奉った。

「神武紀」、「神武」四年の春二月に、詔して曰く、『我が皇祖の靈、天より降りみて、我が

躬を光し助けたまえり。今諸の虜已に平けて海内事無し。以て天神を郊祭りて、用て大

孝を申べたまうべし』とのたまう。乃ち靈時を鳥見山の中に立てて、・用て皇祖天神（日

神と高皇産靈）を祭りたまう」